『古事記』千三百年と霧島市

郷土史への扉

霧島市の観光パンフレットなどを見ると、「天孫降臨の地」という言葉が目に付く。そもそも、この「天孫降臨」という言葉はいったい何に由来しているのであろうか。

答えは『古事記』に書かれている神話に基づいている。古事記の内容を手短に言えば、天上に誕生した神々の子孫が下界に天降り、地上で天皇となり、皇室の基を開く物語といってよいだろう。

天上の神々が宇宙に次々に生まれ、やがてその中のイザナギ（男神）・イザナミ（女神）の神が結婚してオノコロ島という日本の母体を造るところから物語が始まる。二人はさらに淡路島や四国を産み、やがて筑紫の島（九州島）も産む。この後、イザナミは亡くなるが、妻を追って黄泉の国（あの世）に入り込んだイザナギは、ウジのたかった妻の姿に驚いて逃げ帰り、青木が原でケガレをはらい、みそぎをする。この時、イザナギから日の神アマテラスや月の神ツキヨミが産まれる。

次に物語は出雲地方の神、大国主の命が国譲りをする段に変わる。この後、豊葦原水穂国（日本）を治めるため、アマテラスはニニギノ命を下界に遣わす。ニニギは天神アマテラスの孫に当たるので「天孫」と呼ばれる。

天孫ニニギノ命は、日向の高千穂の「くしふるたけ」（霊妙な岳の意味）に天降った。神様の地上に降ることを敬って「降臨」と称する。すなわち「天孫降臨」の呼称の由縁である。

ニニギは地上に降りた後、山の神の娘コノハナサクヤ比売と結婚する。比売は三人の子をもうける。そのうちホデリノ命が兄で海幸彦、ホオリノ命（別名ヒコホホデミノ命）が山幸彦で弟。いわゆる海幸山幸の物語はこの兄弟をテーマにした神話である。特にこの段は「日向神話」と呼ばれる。

ホオリノ命は海の神の娘トヨタマ比売と出会い結ばれる。この比売はウガヤフキアエズノ命を産む。ウガヤはトヨタマ比売の妹、タマヨリ比売と夫婦になり、カムヤマトイワレヒコをもうける。イワレヒコは後に日向から奈良に出て、大和を平定した後、初代天皇となって皇室の基を開いた。神武天皇がそれである。大和平定の物語を「神武東征」という。

ところで、ニニギノ命が天降ったとされる「日向の高千穂」がどこなのかについて、昔から宮崎県高千穂と霧島の高千穂との間で論争がなされている。地元の私たちとしては、霧島の方を採りたい。その理由は古事記が出来る以前、大隅国は「日向」と呼ばれていたからである。さらに天孫ニニギノ命から神武天皇まで一貫して南九州の神社に祭られている点、それらの神様の御陵が鹿児島県内に配置してある点が指摘できる。また、古事記には海幸彦は「隼人阿多君」の祖先と書かれ、山幸彦と血縁の兄弟とされている。これも、日向神話が南九州の隼人を意識して作られたことをうかがわせる。

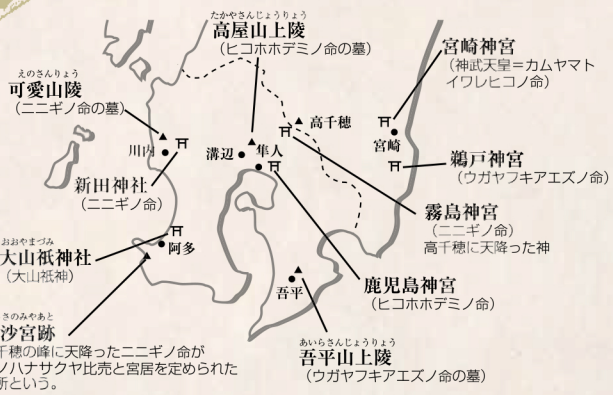
古事記の主要な部分を占める「天孫降臨」、「日向神話」、「神武東征」の物語が、わが南九州を舞台に展開されていることは、非常に重要で注目される。

辺境・野蛮の場所と見なしていたはずの南九州を、古事記は皇室の発祥の地として描き出している。これはなぜだろうか。大きな謎である。

強いて答えを探せば、古事記が神々の世界（天上界）と人間の世界（下界）をつなぐ架け橋として、高千穂の山を使っている点にヒントがあるように思える。「神山」「霊山」「聖山」「秀山」といった美句を並べても褒め尽くせない高千穂の山。あの美しい姿に今一度目を留めてみていただきたい。古事記の作者たちは、神々しい高千穂の山の存在を知っていて、神話の舞台に南九州を選んだのではなかろうか。

古事記は奈良時代の和銅五（七一二）年に書かれた。今年は古事記ができてから千三百年になる。この節目の時、古事記と郷土霧島市の関係を改めて考えてみたいものである。

文責＝藤

神社と御陵

筑紫ノ日向ノ高千穂ノ久士布流多気
（古事記）